

学位請求論文

弥生時代における墓制の展開とその社会
(要約)

會 下 和 宏

本論文は、日本列島各地に展開した弥生墳墓の様々な属性について網羅的に検討を加え、さらに朝鮮半島や中国大陸における墳墓との比較研究によって、弥生時代墓制の社会的、歴史的な特質・意義について論じたものである。

まず第1章では、これまでの弥生墳墓に関する研究史を回顧し、研究の方向性を展望した。特に1960年代以降、九州北部以外の日本列島諸地域でも弥生墳墓の検出事例が増加し、墓域構成、墳丘ないし区画の形態・外表施設、埋葬施設、副葬品などの点で、各地の個性的様相が明らかになっていった。こうした研究状況をふまえ、3点の墓制研究上の分析視点を認識した。第1は、弥生墳墓における葬送儀礼が、集団のどのような死生観に基づいて死というものに対応し、死者を表象化しようとしたのか、第2は、葬送儀礼が社会の統合や結合強化においてどのような役割を果たしたのか、第3は、中国大陸・朝鮮半島における漢代併行期の墓制が、日本列島の弥生墳墓に与えた影響にはどのようなものが見られるのかである。

第1章で認識した問題関心のもとに、第2章と第3章では、弥生時代の日本列島各地に展開した墓制について、まず諸属性の時期的変遷や地域的特色を具体的に抽出した。第2章第1節では、木棺墓・甕棺墓などの「埋葬墓」やそれらを区画する「区画墓」の様相と墓域構成について整理した。弥生中期から後期初頭頃、各地に1辺ないし直径が20mを超える大型区画墓が散見されるようになる。つづく弥生後期前半頃では一時的に大型区画墓が減少するが、弥生後期後葉から終末期頃、再び大型区画墓が増加し、本州日本海側を中心にして40m級のものがみられるようになることを確認した。弥生後期後葉頃以降になると、区画内に埋葬墓が1～2基のみしかない大型区画墓は、刀剣などの鉄製近接武器やガラス製玉類といった特別な副葬品を有する。さらに区画墓が3基以上で墓域を構成する場合は、同一墓域における他の大型区画墓でも特別な副葬品がみられ、稀少品のより安定的、継続的な保有・消費状況が窺えた。

第2章第2節では、近畿中部における方形周溝墓群の配置形態について考察した。弥生前期から中期では、周溝を共有しながら接続するものが多いが、弥生終末期になると周溝を共有せず、独立するものが増加する。弥生終末期頃の方形周溝墓はより選別化が進み、その被葬者は社会的有力者であったと解釈した。

第2章第3節では、時期・地域的に通覧することができる墓壇規模に焦点をあて、その格差が他の墳墓要素とどのように相関し、どのような意味をもつのかについて検討した。弥生前期末葉頃から九州北部で、弥生中期中葉頃から近畿北部で、弥生後期頃から山陰や吉備南部で一部の埋葬墓の墓壇規模が大型化する。そして、弥生後期から終末期の中・大型墓壇は、木槨・舟底状木棺・鉄刀剣副葬などと親縁性がある点を看取した。

第2章第4節では、区画墓に附随する建物跡・土坑・柱穴・敷石状遺構など、葬送行為との密接な関連を窺わせる遺構について確認した。このことから、葬送行為の工程において、こうした建物や柱の設営・撤去、土坑掘削といった作業、これに伴う様々な儀礼の諸段階があったと考えられる。また、埋葬完了から数十年以上経た後続世代における儀礼行為を窺わせる遺構の存在も散見されたことから、埋葬完了からかなり長期の時間経過の

ちにも、儀礼対象としての死者ないし死霊が区画墓内に存在する、あるいは往還するといった観念があった可能性を想定した。

第2章第5節では、未成人埋葬について検討した。概ね3～5歳前後までは土器棺墓、それ以上の幼小児は、区画墓や木棺墓を造営するという一般的傾向がみられる。また、胎乳幼児は玉類か鏃、弥生後期から終末期の幼小児は、玉類か鉄器が選択的に副葬される場合が多い。弥生後期から終末期の近畿北部における幼小児用木棺墓では、同一台状墓に共存する成人埋葬墓の内容によって、副葬玉類の数量に多寡がみられたり、短剣が副葬されたりする事例があることから、生来的な血縁系譜によって副葬品格差が表現されている可能性を考えた。

第3章では、副葬行為の様相について検討した。まず第3章第1節では、西日本における弥生墳墓副葬品の地域性と変遷を把握し、その背景を考察した。弥生後期後葉頃の山陰諸地域をみると、比較的大型の墳丘墓における大型墓壙を有する埋葬墓では鉄刀剣・ガラス製管玉などが副葬され、これに準じる規模の墳丘墓ないし無区画の埋葬墓では鉄鏃・鉄製工具・碧玉製管玉などが副葬されるか副葬品をもたない傾向があることを看取した。このことから墳丘規模・墓壙規模・副葬品内容が一定の相関関係を示す様相を読み取り、ある地域内における縦の階層関係と地域相互における横の連帯・共属関係が形成されていたことを想定した。

第3章第2節では、東日本における弥生墳墓副葬品の地域性と変遷を把握した。弥生後期に副葬される鉄剣・鉄銅釧・鉄石英製管玉・翡翠製勾玉などの製品・素材は、北陸から中部高地を経て関東や遠江東部へといたる陸路によるルートが想定できる。そして東日本では、諸地域における小階層化した社会の上位者が、個別分散的にこうした稀少品流通に関わり、副葬品として消費しう社会であったことを推測した。

第3章第3節では、玉類副葬の器種・素材組成や数量の地域性と変遷を把握した。まず、弥生前期から中期前葉では、朝鮮半島の碧玉製管玉・天河石製半珓型勾玉の影響を受けて、碧玉製管玉・翡翠製勾玉が西日本でみられるようになる。弥生中期中葉から後葉になると、北陸から東日本では赤色の鉄石英製管玉が分布し、九州北部では、主に副葬品を集中保有するような墳墓にガラス製管玉が散見されるようになる。弥生後期初頭から後葉では、本州でもガラス製玉類がみられるようになり、弥生終末期では、九州北部や瀬戸内で素材・器種が多様化する一方、山陰では玉類副葬が退潮する傾向がある。以上のように、日本列島の弥生時代玉類副葬は、朝鮮半島からの影響を受けつつも、独自性をもって展開したことが確認できた。

第3章第4節では、鉄器副葬の地域的様相を整理し、本州において埋納青銅器と副葬鉄製近接武器の排他的ないし偏在的分布を看取した。すなわち、鉄器や青銅器の素材・製品入手先から離れた本州では、地域のシンボルとなる大型金属器やその素材の入手に費やされる労力が、大型鉄器副葬と青銅器埋納のどちらかに選択・限定されてくるものと考えた。

第3章第5節では、弥生墳墓および無文土器時代末期から原三国時代の朝鮮半島南部に

における鉄刀剣副葬の様相を検討した。日本列島の鉄剣のうち、弥生後期中葉頃から終末期の長茎細茎の長剣などは舶載品、短剣は日本列島製が多く含まれる可能性がある。弥生後期中葉頃から終末期における長茎細茎の長剣と鉄刀は本州日本海側に、平面梯形状で短茎の長剣は中部高地・関東に多く分布する。以上のように、広域に流通する鉄刀剣の分布状況を型式ごとにみれば、地域的なまとまりをなしているようである。この背景には、ある地域ごとの鉄刀剣型式のローカルな需要があり、それが流通に反映されたものと考えられる。また鉄刀剣は、特に上位階層を中心にした成人男性被葬者の副葬品であることを確認した。

第4章では、弥生墳墓の特徴をより相対化して捉えるために、東アジア諸地域の墳墓の様相について概観した。まず第4章第1節において、弥生時代と同様に、初期国家成立前後と目される中国大陸中原の二里頭文化期と二里岡文化期の墓を概観し、弥生墳墓との若干の比較を行った。弥生墳墓と二里頭文化期・二里岡文化期の墓との類似点としては、一部の埋葬墓において、木槨が採用されること、朱が敷かれること、青銅器が副葬されることなどが指摘できる。一方、相違点としては、弥生墳墓が墳丘ないし区画をもつ場合が多いことに対して、二里頭文化期・二里岡文化期の墓では明確にはみられない点があげられる。また、弥生墳丘墓の中心的埋葬墓において大型墓壙がみられるのに対し、二里頭文化期・二里岡文化期の墓は長軸3.5m以内とした弥生墳墓小型墓壙の範疇に留まる場合が多い。

第4章第2節では、弥生中期の墳墓とも年代が重なる前漢における皇帝陵と堅穴墓壙を有する諸侯王墓を比較検討した。墳丘規模については、前漢皇帝陵と諸侯王墓の間で明らかな格差が改めて確認できた。また、諸侯王墓の墓道は、墓壙の1辺ないし2辺のみにあるが、前漢四代皇帝・景帝の陽陵の墓道は四周にのびる、いわゆる「亜」字形をなす。以上のように前漢期の中国大陸においては、被葬者の身分秩序が墳丘規模などの量的格差、墓道形態の規制などに投影されるという状況を改めて確認した。墳丘という可視的な要素や墓壙規模の格差が、被葬者間の社会的な縦の関係と密接に関連していることは、社会段階・類型を異にするものの、弥生後期後葉の山陰地域や古墳時代の日本列島でも類比的に看取されることである。ただし、墳丘・墓壙規模が被葬者の地位を半ば制度的に表示するというこうした墓制が、直接的に漢帝国から日本列島に伝播したという積極的な確証は乏しいように思われる。むしろ、墳丘・墓壙規模が大きい程、被葬者の地位を視覚的に誇示しようという、時代・地域を越えた普遍的価値観から生じた現象であると解釈した。

つづく第4章第3節において、漢代における王墓などの副葬品配置を概観し、鉄剣・玉璧・鏡の「重ね置き副葬」について整理した。さらに第4章第4節では、弥生墳墓と前期古墳における鏡の「重ね置き副葬」を検討した。鏡1面と刀剣・工具・その他の器物を重ね置いた「鏡重ね置き副葬a型」、複数面の鏡同士を重ね置いた「鏡重ね置き副葬b型」、複数面の鏡と刀剣・工具・その他の器物を重ね置いた「鏡重ね置き副葬a+b型」があることを整理した。そして、日本列島の弥生中期後半や古墳前期における「鏡重ね置

き副葬b型」の発想が、前漢王墓にみられる多量の玉璧を重ね置く副葬形態を模倣・アレンジして考案されたものである可能性を考えた。

最後に第4章第5節において、日本列島における弥生墳墓を東アジア規模の視点から比較検討した。まず、弥生後期の日本列島を以下の地域に分類した。すなわち、鉄刀剣副葬と大型区画・大型墓壙造営を重視する山陰・吉備南部・近畿北部・北陸地域、鉄刀剣副葬と武器形青銅器埋納の双方に力を注ぐ一方で大型区画・大型墓壙造営行為が稀薄な九州北部・対馬地域、鉄刀剣副葬がなされる一方で青銅器埋納、大型区画・大型墓壙造営が稀薄な中部高地・関東南部地域、青銅器埋納に力を注ぐ一方で鉄刀剣副葬、大型区画・大型墓壙造営が稀薄な近畿中部・東海地域である。そして、漢帝国や周辺諸地域の様相を概観したうえで、弥生後期の日本列島において鉄刀・長剣が分布するのは、九州北部・吉備南部・日本海側諸地域に多いことから、こうした文物の副葬習俗の淵源が、大きくみると漢帝国に求められると考えた。

終章として、まず第1節でこれまでに検討した弥生墳墓の変遷と特色を整理し、それをふまえて第2・3節において、第1章で認識した第1から3までの視点によって、弥生時代墓制の意義について論じた。すなわち終章第2節では、第1の視点である死への対応手段としての弥生墳墓儀礼、あるいは第2の視点である集団統合強化のための弥生墳墓儀礼という関心から、墳墓の構造、副葬行為、墳丘やそこでの葬送行為について改めて解釈を加えた。まず、棺や蓋に粘土の目貼りがなされるなどの埋葬施設の密閉化志向について、悪霊の侵入、あるいは遺体の霊が抜け出し浮遊するのを防ぐといった意識に基づいたものと考えた。また、弥生中期前半から後期において九州北部でみられる甕棺合口部や石蓋上などに金属器が副葬される事例も、甕棺合口や石蓋・木棺の隙間を意識した配置であり、ここからの悪霊侵入、遺体の霊抜け出しを防ぐ意図が窺えると解釈した。

また、単に標識としての墳丘という意味を超越したレベルでの弥生墳丘墓の大型化・荘厳化、ここでの葬送儀礼の複雑化という現象は、人間関係の再確認・再構築という儀礼がもつ本来二義的な方向性が、弥生墳丘墓祭祀という一大イベントのなかに埋め込まれ、肥大化していったものであると捉えた。つまり、葬送儀礼の主催者が、新たに地域集団をまとめあげていく後継者として必要な権威の継承・誇示や求心性・正統性の教化・強化をはかるうえで、弥生墳丘墓祭祀がきわめて重要な政治的パフォーマンスであったと想定した。

終章第3節では、第3の視点である弥生墳墓にみられる日本列島外からの影響について考察した。弥生墳墓における鏡多量副葬や鉄刀剣副葬は、遺体を腐敗から護る辟邪を意識したものであったことが窺われ、大きくは中国大陸にその淵源が求められると想定される。また、「上墓」の風習といった墳墓祭祀を重視する漢の影響に触発されて、本州西部において墳丘墓が発達した可能性についても言及した。

以上が、日本列島に展開した弥生時代墓制について、その歴史的、社会的意義を論じた本論文の要約である。